

ベンガル湾海域世界の今日的動態に関する一考察 ——マレーシアのタミル系ムスリム移民に着目して——

中 島 咲 寧*

The Contemporary Dynamics of the Bay of Bengal Maritime World in the Tamil-Muslim Immigrant Community of Malaysia

NAKAJIMA Sakine*

Abstract

This paper examines how the Bay of Bengal maritime network, which preceded the nation-state era, has evolved and continues to influence today's Tamil-Muslim immigrant community in Malaysia. Since pre-modern times, Tamil Muslims have migrated from South India to the Malay Peninsula, primarily as traders or merchants. They established a cosmopolitan community through partial settlement and intermarriage with local Malays. Despite significant changes to the character of this community during the late nineteenth to early twentieth centuries, the migration pattern and the fluidity of members' ethnic identity persisted into the nation-state era.

Detailed ethnographic field research conducted in Penang reveals that the contemporary Tamil-Muslim immigrant community retains its cosmopolitan character, encompassing individuals with diverse backgrounds in birthplace, official ethnic classification, and nationality. This enduring diversity is sustained through the continuous influx of new immigrants based on historical maritime networks. Thus, the Tamil-Muslim immigrant community in Malaysia has persisted into the present, rooted in the historical continuity of the Bay of Bengal maritime network, which has overlapped with the framework of the nation-state.

Keywords: Tamil Muslims, maritime networks, Penang, Bay of Bengal, Indian Ocean, Indian diaspora

キーワード：タミル系ムスリム、海域ネットワーク、ペナン、ベンガル湾、インド洋海域世界、インド人ディアスポラ

* 日本学術振興会特別研究員（DC）京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程：Japan Society for the Promotion of Science, Doctorial Course (DC) Research Fellowships, Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University, Yoshida-Honmachi, Sakyo-ku, Kyoto 606-8501, Japan
e-mail: nakajima.sakine.47h@st.kyoto-u.ac.jp

DOI: 10.20495/tak.25004

2025 年 3 月 28 日 掲載決定, 2025 年 7 月 1 日 J-STAGE 早期公開

はじめに

本稿は、近代国民国家の誕生以前より存在する海を跨ぐ広域ネットワークの今日的展開を、移民社会の歴史の変遷への着目を通じて明らかにするものである。特に、南アジア地域と東南アジア地域の狭間に位置するベンガル湾海域における歴史的な人の移動に着目し、マレーシアにおけるタミル系ムスリム (Tamil Muslim)¹⁾ 移民社会の歴史の変遷と今日的状況を事例として、国民国家の時代を生きる移民社会が、国民国家に先行する地域間の連関の歴史といかなる連続性を持つものとして今日に存在しているのかを検討する。

本論に入る前に、本稿の主役であるマレー半島²⁾ のタミル系ムスリム移民について簡単に説明しておきたい。後程詳しく論じるように、当集団は南インドの東側、コロマンデル海岸 (Coromandel Coast) に形成されたムスリムの海商集団をルーツとする人々であり、東南アジア島嶼部一帯のイスラーム化が進んだ13世紀ごろには既に当地域にて交易活動を行っていたとされている。イギリス植民地統治期における人口流入を背景にマレー人 (Malays)、華人 (Chinese)、インド人 (Indian) の三大民族を主な構成員とする多民族国家となり、その人口分布や歴史的な経緯を背景としてインド人=ヒンドゥー教徒、マレー人=ムスリムと捉える見方が定式化している現代のマレーシアにおいて、³⁾ インドに出自を持ち、かつイスラームを信仰する当集団は、マレー人社会とインド人社会の双方の狭間に置かれ、その民族的定位において曖昧な立場に置かれている。⁴⁾

-
- 1) マレーシアにおける南アジア系のムスリムの大半はタミル系 (Tamil) であり、彼らを指す呼称としては「インド系ムスリム (Indian Muslims)」が最も一般的であるが、「インド系」という大きな括りは異なる歴史的経緯で南アジアから流入した他のムスリム集団 (グジャラート系、ベンガル系など) を含みいれてしまう為、本稿においては必ずしも適切ではない。よって本稿では、このように広く南アジア地域を出自とするムスリムを指す場合には「インド系ムスリム」を使用するが、より限定的に南インド東岸部 (現タミル・ナードゥ州) を出自とするムスリムを指す場合には「タミル系ムスリム」を使用する。
 - 2) 本稿では、マレー半島という語を現在の半島部マレーシアに限定せず、現在のタイとミャンマーの一部、及びシンガポールを含む地理的範囲として使用する。なお、そのなかで特に今日の半島部マレーシアにおける状況に議論を限定していく理由は、タミル系ムスリム移民集団の流入が生じた主要な地域が現在の半島部マレーシアであること、また後述するように、特に近代以降の半島部マレーシアにおける複合社会の形成が、インド系ムスリム移民の位置づけに大きな影響を与えていったからである。
 - 3) 2020年の国勢調査において、マレーシア国内の三大民族別人口分布はマレー人 (その他先住民を含まない) が56.8%、華人23.2%、インド人が6.7%、宗教別の人口分布がイスラームが63.5%、仏教徒が約18.7%、キリスト教徒が9.1%、ヒンドゥー教徒が6.1%となり、民族と宗教の分布はおおむね一致している [Department of Statistics Malaysia 2022]。また良く知られていることだが、東南アジアの島嶼部では18世紀末・19世紀初頭以降を中心にイスラームへの改宗が「マレーに入る (Masuk Melayu)」ことを意味するようになり [加藤 1990: 238]、マレー性とイスラームが同義的に捉えられてきた慣習がある。
 - 4) 特にマレー人との関係性におけるインド系ムスリム住民の位置づけの歴史の変遷については、中島 [2024] を参照。

多数派集団であるマレー人が常に国家運営の実権を握り、民族的帰属が個人の日常生活の様々な要素を規定するマレーシアにおいて、インド系ムスリムは国内で少数派であるインド人人口のなかでもさらに少数派であり、⁵⁾ かつその宗教的属性によって、マレー人社会との間で民族的定位がはっきりしない人々である。よって先行研究においてはもっぱら、その曖昧な民族的帰属を背景にアイデンティティ危機の問題を抱える存在として、また同じムスリムであるマレー人との日常的な交流や通婚などを経て、漸次的にマレー人社会に同化しつつある少数派集団として描かれてきた [e.g. Chuah *et al.* 2011; Nagata 1974; 2006; Pillai 2015; Stark 2006]。こうした描写は一面では正しい。実際に、マレー人を主体とする国家運営のもと、マレー人にその土着性を根拠とする特権的地位⁶⁾ が認められている現代のマレーシアにおいて、彼らがマレー人社会に同化する誘因は常に働いてきたといえる。しかしいざ現在のマレーシア社会に目を向けると、「タミル系ムスリム」と呼ばれる人々は確かに存在し続けているように考えられる。例えばそれは、都市部を中心に全国でみられるようなロティ・チャナイ (Roti Canai) やテ・タレ (Teh Tarik) などの軽食を提供する大衆食堂⁷⁾ や両替商、宝石商といったタミル系ムスリムのエスニック・ビジネスや、現在の半島部マレーシア西岸部の主要都市を中心に存在するタミル系のモスク、⁸⁾ また全国規模で活動するインド系ムスリムの社会組織⁹⁾ の存在などからも読み取れる。つまり、その一部がマレー人社会に漸次的に同化していく傾向が見られる一方で、タミル系ムスリムという集団そのものは、現在に至るまでマレーシア社会に存在し続けているのである。

こうした矛盾の背景には、以下に挙げる2点の問題点がある。まず一つが、上述した先行研究の多くが、主観的なアイデンティティの問題に焦点を当てすぎていることである。これらは

-
- 5) 2010年の国勢調査において、マレーシア国内の全インド人人口に占めるヒンドゥー教徒とイスラーム教徒の割合はそれぞれ86.1%と4.1% (小数点第二以下切り捨て) であり、インド人社会の多数派はヒンドゥー教徒であることが分かる [Department of Statistics Malaysia 2011]。一方、マレーシアの国勢調査における民族範疇の選択は自己認識に基づくものであり、インドに出自を持つムスリムの中には自らの範疇を「マレー人」と選択する人も存在するため [Nagata 2006: 517]、実際には全インド人中のムスリムの人口 (2010年調査の時点で78,702人) よりも多いと考えられる。
 - 6) マレーシア連邦憲法153条。
 - 7) 一般的にママッ・ストール (Mamak Stall, ママッはインド系ムスリム集団を意味する) やクダイ・ママッ (Kedai Mamak, 「インド系ムスリムの店」を意味する) と呼ばれる飲食店。ロティ・チャナイは薄型のパン、テ・タレは泡立てて入れるミルクティーを指す [Duruz and Khoo 2015: 67]。
 - 8) 小規模なモスクやスラウなどを除いた代表的なものだけでも、マレー半島北部から順に Masjid Kapitan Keling (ペナン), Masjid India Ipoh (イポー), Masjid India (タイピン), Masjid India Tunku Sultan Klana Klang (クラン), Masjid India (クアラルンプール), Masjid Kampung Kling (マラッカ), Masjid India Johor Bahru (ジョホール・バル) などがある [Budiwanti 2012]。
 - 9) 一例として、1973年設立の、全国のインド系ムスリム社会組織58団体を総括する非営利組織であるマレーシア・インド人ムスリム団体連合 (Persekutuan Pertubuhan India Muslim Malaysia, PERMIM) が挙げられる。なお本団体は名称を「インド人ムスリム」と銘打っているものの、SNS上での活動報告などは主にタミル語で行われており、タミル系ムスリムを主な構成員として組織されている様子が窺える。

つまり、宗教が民族の分類指標でありかつマレー人に特権的地位が認められているマレーシアにおいて、民族的定位が曖昧なタミル系ムスリムたちはその帰属意識をマレー人の側に傾斜させていくという見方であり、これは特殊マレーシア的社会構造のもとでのタミル系ムスリムの主観的アイデンティティを取り巻く状況の説明としては説得力があるが、そうした傾向にもかかわらず全体としてのタミル系ムスリム社会が存続している理由を説明できていない。そしてもう一つは、これら議論の分析枠組みがマレーシアという国民国家の存在を与件とし、そこに視野を完結させていることである。マレーシア一国に視野を限定するのであれば、多数派に吸収されつつある少数派というタミル系ムスリムの周縁の立ち位置は明らかである。しかし、こうした一国主義的な視点からは、彼らが海上交易を通じて南インドとマレー半島を結び、ベンガル湾の東西に広域的なネットワークを展開してきたという歴史や、そこに蓄積された繋がりが現在のタミル系ムスリム社会にいかなる影響を持つかといった重要な側面が等閑視されてしまう。

なお、こうした海を媒介として繋がり合う地域の動態については、歴史研究、特に海域史研究の分野において盛んに論じられてきた。その要諦は、地域と地域をつなぐ海の視点から陸地国家の境界を前提とした個別の国民国家史または地域史を超える連関の歴史を描きだそうとする姿勢である〔鈴木 2016: 79〕。例えばその代表的な論者といえる家島は、ユーラシアとアフリカ大陸における複雑多岐な諸民族・社会・文化の移動と交流を相互有機的に結び付けてきた原動力の舞台としてインド洋に着目し、そうした人やモノのネットワークが一つの全体として機能する歴史舞台を「インド洋海域世界」と呼んで、その連関の歴史を論じている〔家島 1993〕。また、本稿が着目するベンガル湾海域に焦点を当てたアムリットは、その沿岸地域が相互に共有してきた歴史が国民国家や学問体系としての「地域（ここでは特に東南アジア地域と南アジア地域）」に分断されてきたという問題意識に基づき、ベンガル湾沿岸一帯が共有する歴史像の提示を試みている〔Amrith 2013a; 2013b〕。とはいえ、こうした海域史研究はマクロな視点からの分析であり、それらの海域における連関の活力は 18 世紀半ば以降の西洋諸国の海洋進出に伴う帝国主義的秩序の確立や近代国家体制の浸透とともに崩壊したという立場を取ることが多いため、¹⁰⁾ 海域に蓄積されてきた広域的なネットワークがその後の時代にどう流れ込み、国民国家の時代としての今日にいかに関係しているのかを分析する視座を持ち合わせていない。実際に、南インドにおけるタミル系ムスリム海商集団の誕生から、マレー半島への流入の歴史的過程、またその移民社会のマクロな変遷に着目した研究は一定数存在するが〔e.g.

10) インド洋海域世界に関する研究動向を整理した鈴木は、既存研究がインド洋海域世界の一体性が 18 世紀半ば以降には西洋諸国の参入を経て分解・崩壊したとする共通理解を持つことを指摘したうえで、その時代を「崩壊」ではなく「大きな変化」の時代と捉えなおす新たな理論構築の必要性を強調している〔鈴木 2016: 86〕。

Fujimoto 1988; Khoo 2014; McPherson 1990],¹¹⁾ その分析スケールはあくまでマレーシア（マラヤ）の独立以前までの時代に限定されており、国民国家の時代以降における海域ネットワークの展開には触れられていない。

よって本稿では、こうした国民国家に先行して存在してきた海域ネットワークの国民国家の時代以降の趨勢に着目し、それが今日における移民社会の動態にいかなる連続性を持つものとして展開しているのかを移民社会を構成する人々の国籍（市民権）¹²⁾ や民族 ID といった客観的な属性に着目しつつ考察する。この点において本稿は、海域史研究の視点に依拠することで、国民国家（またはその集合体としての「地域」）という分析枠組みからは見えづらい広域ネットワークの歴史的連続性やそれが生み出す地域社会の動態を描きだそうとする、「地域」を跨ぐ地域研究に向けた一試論である。

本稿の構成は以下の通りである。まず第 I 章では、タミル系ムスリム移民集団によるマレー半島への流入の歴史的経緯について二次文献をもとに整理したうえで、その過程で彼らがいかなる移民社会を形成してきたのかを、植民地初期の刊行物や同時代の歴史人物の自伝に基づき検討する。第 II 章では、そうした移民社会が、植民地統治の本格化と国民国家建設の過程でいかなる影響・変化を経験したのかを論じる。第 III 章では、そうした状況の変化の結果、現代のマレーシアにおけるタミル系ムスリム移民社会がどのような外形的・公的帰属を持つ人々によって形成されているのかを、ペナン州ペナン島（Pulau Pinang）にて実施した筆者の聞き取り調査及び参与観察をもとに記述する。またそれら事例を踏まえて、国民国家に先行して存在してきたベンガル湾海域を跨ぐネットワークが、今日のマレーシアにおけるタミル系ムスリム移民社会においていかに展開しているのかを考察する。そして最後に、結論と今後の展望を述べる。

I マレー半島におけるタミル系ムスリム移民社会の誕生

本章では、タミル系ムスリム移民によるマレー半島への流入の経緯、及びコミュニティ誕生の歴史的背景を、イギリスによる植民地支配が本格化する一歩手前の 19 世紀前半までの時代

11) なお、マレーシアにおけるインド系移民社会の歴史に関する研究の多くはその人口の大多数を占めるタミル系ヒンドゥー教徒、より具体的には一部エリート層や植民地期統治期に流入したプランテーション労働者などを主要な分析の対象とするものであり [e.g. 水島 1998; 重松 1999; 山田 2000; Ampalavanar 1981; Sandhu 1969 など]、これら大多数のインド系移民とは流入経緯の異なるタミル系ムスリム移民に関する研究は限定的である。

12) インドおよびマレーシアでは独立以前から現在に至るまで当該国に公的な帰属を持つ市民を指す語として市民権（citizenship）という語が使われているが、本稿では混乱を防ぐため、独立以前までの文脈では市民権、独立以降の文脈においてはその意味内容においてより近い国籍（nationality）という語を用いる。

に焦点を当てて概観する。そのうえで、そうした流入の過程において彼らがマレー半島の港市においていかなる移民社会を形成してきたのかを、イギリス東インド会社職員の記録や当時を生きた作家の自伝における記述をもとに検討する。

1. マラッカ海峡への進出——13世紀から19世紀後半まで

タミル系ムスリム商人の東南アジア島嶼部への流入の歴史を語るうえでは、7世紀にアラビア半島にて成立したイスラームの信仰が、アラブ人商人の流入を通じて南インドの沿岸部にもたらされた8世紀ごろにまでさかのぼる必要がある。¹³⁾ 南インド沿岸部におけるイスラーム化はアラブ系商人の通時的な流入や現地女性との通婚を通じて進行し、13世紀ごろにはベンガル湾に面したコロマンデル海岸に有力なムスリム商人集団が誕生していたとされる〔和田 2022: 282〕。こうして誕生したタミル系のムスリム商人集団¹⁴⁾ はやがて、イスラームの誕生以前から季節風交易の要衝として多くのインド人商人が往来していたマレー半島北部のクダ (Kedah) にも流入し〔Fujimoto 1988: 3〕、やがてマラッカ海峡へと勢力を拡大していった。

13世紀以降、交易活動を通じてもたらされたイスラームの信仰が東南アジア島嶼部にて拡大すると、やがて14世紀末に成立したマラッカ (Melaka) 王国が東西交易の中継地として発展し、タミル系ムスリム商人もまたマラッカに拠点を築いて交易活動を行った。交易の管理を通じて得られた富や政治・文化的威信を王の権威の根拠とし、かつイスラームが王権を支える正統な政治的根拠となっていた当時のマレー系王権において、外来の出自を持つムスリム商人たちはイスラームの信仰を媒介に王族をはじめとするマレー人の支配者層とより強固な関係性を築いていった〔*ibid.*: 20; Khoo 2014: 35; McPherson 1990: 36〕。例えばマラッカ王国の『マレー王統記』 (*Sejarah Melayu*) には、コロマンデル出身のインド人使者がパサイ (Pasai) 王の改宗に重要な役割を果たしたとする記述や〔Amrith 2013b: 39〕、タミル系ムスリム商人がその優れた外交能力を背景として王族から重用されたり、王族の娘との通婚を通じて宮廷入りを果たしていたりする様子が描かれている〔Fujimoto 1988: 17〕。

一方、1511年マラッカがポルトガルに占領されると、ポルトガル本国における国土回復運動

13) 南インドにおけるアラブ人商人の流入はインド亜大陸西岸部のマラバール海岸 (Malabar Coast) から始まったとされ、その後まもなくして東岸部のコロマンデル海岸でもアラブ人居住地が形成された。こうして誕生した南インド沿岸部のムスリム社会は、アラブ人と改宗したタミル人、また通婚の結果として誕生したインド系アラブ人を含むものであり、マラバール海岸に生じた集団はマッピラ (Mappila)、コロマンデル海岸に生じた集団はマラッカヤール (Marakkayar)、ラーヴッター (Rawther)、ラッバイ (Labbai)、カヤラル (Kayalar) などと呼ばれる下位集団 (クラン) を形成していた〔Arasaratnam 1986: 218–219〕。

14) こうしたコロマンデル海岸出身でタミル語を話すムスリムの海商集団は、主に西欧人によってチュリア (Chulia) と呼称された。その語源は、9～13世紀ごろにかけて南インドのコロマンデル海岸部で強い勢力をもったチョーラ (Chola) 朝に由来すると考えられている〔Arasaratnam 1986: 219; Fujimoto 1988: 30; Khoo 2014: 7, 34; McPherson 1990: 44 注 2〕。

を背景としたムーア（Moor）人（＝ムスリム）に対する交易活動への妨害の影響を受け、多くのタミル系ムスリム商人がポルトガルによる支配の外にある港へと拠点を移していった。この時代に多くのタミル系ムスリム商人を引き付けたのがマレー半島西岸のテナセリム海岸（Tenasserim coast）であり、マレー半島の海岸沿いを結ぶ活発な錫交易を展開した [McPherson 1990: 36-37]。そうした錫交易の展開を背景として17世紀にはバンテン（Bantam）やペラ（Perak）、アチェ（Ache）などのマレー王権との関係性を強化していったが、¹⁵⁾ ジャワ島やスマトラ島を中心に東南アジア島嶼部で拡大したオランダによる排他的な商業システムとムスリム商人集団に対する排斥のあおりを受け、マラッカ海峡に離散していたタミル系ムスリム商人たちの多くが18世紀初頭にはテナセリム海岸やクダ、プーケット（Phuket）といったマレー半島の北部地域に拠点を移動させていった [ibid.: 38-39]。¹⁶⁾

18世紀後半になると、インド製品の市場、かつ中国向け商品の輸入先となる拠点の確立を模索していたイギリスがマラッカ海峡に進出し、イギリス東インド会社のカントリー・トレーダーであるフランシス・ライト（Francis Light）がクダ国王との交渉の末に1786年にペナン島を割譲させ、自由貿易港とした。当時既にクダにおける有力商人集団を形成していたタミル系ムスリムたちの多くは、¹⁷⁾ やがてその経済活動の拠点をペナンに集中させるようになり [ibid.: 41]、開港後まもなくしてタミル系ムスリム商人が流入し、居住区を築いた。開港当初は、既にクダやマラッカ、アチェなどで大成した有力商人による移住が中心であったが、1780年代の末にはライトによる記録にも表れるように、「ナグール（Nagore）、ナガパタム（Nagapatam）、ポルト・ノーヴォ（Porto Novo）、ボンディシェリ（Pondicherry）からのチュリア¹⁸⁾の船の来航がペナン港における日常風景となっていた」 [Sandhu 1969: 118]。また、同じくライトによる記録には、1794年時点で約1,000人のタミル系ムスリムがペナンに定住しており、（商売を行う男性のみならず）家族連れでの定住もみられたこと、またコロマンデル海岸からの船が毎年1,500人～2,000人程のタミル系ムスリムを運び、彼らはペナンで商業や様々な労働に従事していたことが描かれている [McPherson 1990: 42]。

このように、アラブ人や華人といった他の移民集団に先駆けてペナンに流入したタミル系ムスリムたちは、開港後の数十年間にわたってその人口規模において支配的な地位を保った。こ

15) 例えばペラでは、タミル系ムスリム商人がスルタンから王の専属交易人に任命され、領域内の錫交易の管理を任されていた [Arasaratnam 1986: 147; Khoo 2014: 36; McPherson 1990: 37]。

16) 1760年代に生じたビルマーシャム間の戦争によって、タミル系ムスリム商人の多くが錫交易で利益を得ていたペグーとアユタヤ（Ayuthia）を結ぶ交易路が使用不可能になったこと、また錫交易の中心地であったプーケットも混乱に陥ったことから、18世紀末には多くのタミル系ムスリム商人がクダに移動したとされている [McPherson 1990: 40]。

17) その様相は、1786年に書かれたライトによる書簡にタミル系ムスリム商人がクダの王の専属交易人を務めていることに対する不服が述べられていることに表れている [McPherson 1990: 40]。

18) チュリアという語の説明は注釈14を参照。

うした開港初期のペナンにおける彼らの有力な社会的地位は、タミル系ムスリムの有力海商であったカディール・ムハディー（Caudeer Mohuddeen, ?-1834）が、1801年に初代ペナン副総督のリース（Leith）によってカピタン・クリン（Kapitan Keling, インド系の頭目）¹⁹⁾に任じられたことや、そのカディール・ムハディーによるペナン市庁への掛け合いを経て、同じところにタミル系ムスリムの祈りの場としてのカピタン・クリン・モスク（Masjid Kapitan Keling）建設のための土地が与えられたことなどにも表れている [Khoo 2014: 75-77]。²⁰⁾ 定住化したタミル系ムスリムの多くは、ジョージタウン（Georgetown）のチュリア通り（Chulia Street）、ピット通り（Pitt Street）、²¹⁾ キング通り（King Street）の周辺に居住し、小売商や宝石商、両替商などの職業に従事した。ペナンにおけるその人口規模は1830年代にはペナン島の総人口35,000人中の約9,000人を占めるに至り [Fujimoto 1988: 29]、1850年代から60年代にかけての華人人口の大幅な増加を見るまでは、その人口規模において有力な移民集団であり続けた。その後、1819年に開港した自由港シンガポールの発展に伴いタミル系ムスリム商人の一部はシンガポールに移動し、ペナンを含む他の港市との間に構築された交易ネットワークを活用して活発な交易を行った。²²⁾

2. コスモポリタンな移民社会——19世紀初頭のペナン、マラッカにおける状況

以上見てきた通り、南インドのコロマンデル海岸部に誕生したムスリム商人集団をルーツとするタミル系ムスリムたちは、13世紀以降を中心にマラッカやクダ、ペナンやシンガポールといったマレー半島西岸部の港市に流入し、移民社会を形成してきた。外来者に広く門戸を開き、多様な人々を包摂するコスモポリスとして発展してきた東南アジアの港市において、イスラ

19) 19世紀初頭のペナンでは、各民族集団の代表者がカピタンに任命され、首長はそのカピタンを通じて特定の民族集団に対し指示を出したり交渉を行ったりするというカピタン制度（Kapitan System）が導入されていた [Khoo 2014: 75, 77]。なお、クリンは古代南インドのカリナ王国（Kalinga）に起源を持ち、主にマラッカ海峡のマレー語話者の間で南インド出身者（South Indians）を指す意味で数世紀にわたって使用されてきた語である [ibid.: 7]。

20) 1801年には、同じくタミル系ムスリム海商によるペナン市庁への働きかけを通じて、カーディリー教団のスーフィー、シャフル・ハミド（Shahul Hamid, 1490-1579）を祀る聖者廟であるナグール・ダルガー（Nagoe Dargah）が建立されている。なお、実際に遺体が眠る墓廟は南インドのナグールに位置し、ペナンの廟は移住した帰依者たちの寄付で建立されたレプリカ（本物の遺体が存在しない墓廟）である [Amrith 2013b: 90; Khoo 2014: 68]。

21) ビット通りは1989年に改名され、現在はカピタン・クリン通り（Jalan Masjid Kapitan Keling）と呼ばれている。

22) シンガポールにおけるタミル系ムスリム商人の居住区は、現在のテロック・アイル（Telok Ayer）通り周辺である。付近にはジャメ・モスク（Masjid Jamae, 1826年設立）、アル・アブラール・モスク（Masjid Al-Abrar, 1827年設立）といったタミル系ムスリムの宗教施設が集中しており、ペナンと同様の経緯で建立されたナグール・ダルガー（1820年代後期設立）は現在、当地域におけるタミル系ムスリムの歴史に関する展示を行う施設（Nagore Dargah Indian Muslim Heritage Centre）となっている [cf. Tschacher 2017]。



図1 タミル系ムスリム商人が拠点としたマラッカ海峡の主な港
出所：McPherson [1990: 36-42] の記述をもとに筆者作成



図2 タミル系ムスリム商人が拠点としたコロ
マンデル海岸の主な港
出所：Sandhu [1969: 118] の記述をもとに筆者
作成

ムの信仰を共通項として現地人社会と密接な関係性を築いた彼らは、そうした港市の状況を体現するかのような、流動的で多種混淆的な集団を構成してきた。以下では19世紀初頭の港市におけるその様相を、イギリス東インド会社職員による描写と、当時のマラッカを生きた歴史的人物の自伝の内容をもとに検討する。

19世紀初頭、イギリス東インド会社から派遣されペナンやジャワなどの港市に滞在したクロウファード (John Crawford, 1783–1868) は,²³⁾ 当時港市に居住したインド人、華人、アラブ人といった外来集団とその社会的特徴を描写した記録のなかで、タミル系ムスリム集団を以下のように紹介している。

西からの季節風が吹くと、(中略) その人々の大群を乗せた多数の船舶が毎年やってくる。この冒険家たちの性格は、抜け目なく、しなやかで、非好戦的で、嘘つきで、強欲である。交易が主な目的であるが、(中略) 金払いの良い労働があれば従事する。彼らの大部分はインドに戻るが、定住するものも相当数おり、出身国の女性が彼らに帯同することは稀なため、現地の女性と通婚する。こうした結びつきによって形成された混血の人種は、両親の悪癖を併せ持つ、決して愛想がよいとは言えない性格を持つ。彼らはプラナカン (Peranakan),²⁴⁾ またはハーフ・カースト (half-casts) と知られ、両親の言語に精通し、その鋭敏さや活発さ、能力によって、土着の王侯による庇護を多く享受している。[Crawford 1820: 133–134]

描写に見られるネガティブなイメージは当時の彼らが東インド会社と競合する有力な商人集団として認識されていた故と考えられるが、より重要なのは、当時のペナンやジャワなどの東南アジアの港市において、南インドからの絶え間ない人の流入、そしてその一部の定住化、また現地人 (マレー人) 女性との通婚を通じた混血集団の誕生というサイクルが日常風景として存在していたということである。²⁵⁾ 以下ではそうした移民社会の状況を、同時代のマラッカにて活躍したアブドゥッラー・ビン・アブドゥル・カディール (Abdullah bin Abdul Kadir, 1797–1854) の自伝の内容からより具体的に検討する。

23) クロウファードは医療職員としてペナンに1808年から3年間、その後行政官としてジャワに1811年から6年間滞在し、その間に見聞きした情報をもとに、当時の港市に存在した多様な集団の社会的特徴について記した *History of Indian Archipelago* (インド群島の歴史) を著した [Crawford 1820]。

24) プラナカンとは、土着民 (anak negeri) と外来者との通婚から生まれた子孫を意味する語である。その人口の多さから、プラナカンという語は華人プラナカン (Peranakan Chinese) に関連付けられることが多いが、プラナカンには様々な種類があり、インド系ムスリムとマレー人女性の通婚から生じた子孫はインド系プラナカン (Peranakan Indian), またはジャウィ・プラナカン (Jawi Peranakan) と呼ばれていた [Suryadinata 2002: 70]。ジャウィ・プラナカンという語については注釈33も参照のこと。

25) 19世紀以前の東南アジアの港市における来航者は主に単身の男性であり、彼らと現地人女性との通婚は一般的に行われ、互いに利益となる提携関係が築かれていた [cf. 弘末 2022: 67–76]。

18世紀末のマラッカに生まれ、²⁶⁾ イギリス東インド会社の下でマレー語の通訳・書記を務めたアブドゥッラーは、1849年に自伝、『アブドゥッラー物語』(*Hikayat Abdullah*)²⁷⁾を著し、一般的には「近代マレー文学の父」として知られる人物である。一方で、その自伝に描かれる彼の出自や生活環境は、歴史学者のアムリットが言うように、当時の彼が「インド洋の環に組み込まれ、コロマンデル海岸にルーツを持つ、コスモポリタンでポリグロットな商人集団の代表」[Amrith 2013a: 187–188]であったという事実を示している。例えば自伝の冒頭で彼は、自身の出自を以下のように述べる。

私の曾祖父は、イエメン出身のアラブ人、ウスマン家の出身である。その名をシャイフ・アブドゥル・カディールといい、宗教と語学の教師(グル)であった。やがてイエメンを離れて東に向かい、ナグルのクリンの地²⁸⁾まで旅をした。(中略)彼は結婚し、四人の息子をもうけた。(中略)彼の死後、息子たちは東に向かって旅立った。(中略)(筆者注：息子の一人であり、アブドゥッラーの祖父にあたる)ムハンマド・イブラヒムはマラッカに来て、私の祖母と結婚した。祖母はプリ・アチといって、シャイフ・ミラ・ルバイ²⁹⁾の娘であった。私の父が生まれたとき、その子はシャイフ・アブドゥル・カディールと名付けられた。こうして彼は、祖父の名の祝福を受け継いだのである。[アブドゥッラー 1980: 6]

こうしたアブドゥッラーの家系図は、前節に見たタミル系ムスリムの移動の歴史を体現する好例であるといえるだろう。そして、ここに登場する曾祖父と祖父の例からは、単身で移動してきた男性が現地人女性と通婚し、混血の子孫を残すというサイクルの存在が確かに読み取れる。また、アブドゥッラーは彼自身が生まれ育った環境について以下のように記述している。

私の父はヒンドゥー語、つまりタミール語³⁰⁾を話し、タミール語でものを書いたり簿記

26) 彼は自身をカンボン・パリ(Kampung Pali, Kampungはマレー語で村、Paliはタミル語でモスクを指す)の出身と述べている[Abdullah 1963: 10]。カンボン・パリは、マラッカにおけるタミル系ムスリム商人の居住区であったとされている[Khoo 2014: 35; McPherson 1990: 35]。

27) 本文中における本書の引用箇所はすべて、中原道子による翻訳『アブドゥッラー物語——あるマレー人の自伝』(1980年、平凡社)に依拠している。

28) ナグル(マレー語原文ではnēgēri Nagur [Abdullah 1963: 4])は南インドのコロマンデル海岸沿いに位置する港町のナグール、ここでのクリン(マレー語原文ではKēling [ibid.])は地理上の南インドを指す。

29) アブドゥッラーによる直接の言及はないが、祖母の父親とされるシャイフ・ミラ・ルバイのルバイ(マレー語原文ではShaikh Mira Lēbai [Abdullah 1963: 5])とは、注釈13にて言及したコロマンデル海岸におけるタミル系ムスリムの下位集団ラッバイを意味するものと考えられる。よって祖母もまた、タミル系ムスリムの出自を持つ人物であると推測できる。

30) なお、中原[1980]の日本語訳においてタミール語と表記されている部分は、マレー語の原文においてはBahasa Kēling(インドの言語)と表記されている[Abdullah 1963: 6]。

をつけていた。マレー語でも同じようにものを書いたり、マレー人のラジャに贈る手紙を書いたりしていた。(中略) 私の母の祖父母はケダーから来たインド人である。彼らはマラッカに移って来て、そこでイスラムに帰依したのである。[同上書：7]

父は私をタミール語とその書き方を学ぶために、先生の所に連れて行った。それはヒンドゥーの言葉で、祖先の時代から、マラッカのいい家の子供たち、金持の子供たちはみな、その言葉を学ぶのが習慣になっていた。当時マラッカには沢山のタミールの商人が集まっていたので、タミール語で計算が出来たり、会計が出来たり、言葉を話すことが出来ると、彼らとの付き合いに役立ったのである。[同上書：25]

これらの描写からは、マラッカで生まれ育った両親の下に生まれた彼が、母語としてのマレー語を操る傍ら、自らの出自のある土地の言語として、そして当時のマラッカにおいてその習得に様々な社会的要請があった言語としてタミール語の世界にも身を晒し、マルチリンガルな生活空間のなかを生きていたことが読み取れる [Amrith 2013b: 71-72]。ここから、19 世紀初頭のペナンやマラッカにおけるタミール系ムスリム集団が、南インドからの絶え間ない人の往来とその一部の定住化、または現地のマレー人女性との通婚を通じて、流動的であり、かつ多様な背景を持つ人々を内包するコスモポリタンな移民社会を形成していたことが分かる。

II 揺らぐ港市——近代国家制度による囲い込み

しかし、こうしたコスモポリタンな性質、つまりはそれを可能にする構成員の流動性や内部の多種混雑性は、19 世紀後半以降のイギリス植民地支配の本格化に伴う近代的な民族概念の浸透や、20 世紀以降の脱植民地化に伴う国家建設の過程において、近代国家制度のもとに囲い込まれ、変容を迫られていくことになる。本章では、19 世紀後半以降の時代における状況の変化について、特に民族観と人の移動を巡る状況に焦点を当てて検討する。

1. 民族と国家の狭間へ——19 世紀後半から 20 世紀初頭

1786 年のペナン割譲後、1819 年にシンガポールを領有、そして 1824 年に英蘭条約のもとにマラッカを獲得したイギリス東インド会社は、1826 年にはこれら 3 つの港市を海峡植民地 (Straits Settlements) としてまとめ、その後英直轄領とした。こうした交通の要衝に限定されていた支配はその後徐々にその後背地となるマレー半島の諸地域にも広がり、1874 年にペラ国王との間で結ばれたパンコール条約 (Pangkor Engagement) を嚆矢として、19 世紀末～20 世紀初頭には現在の半島部マレーシアにあたる地域一帯が連合マレー州 (Federated Malay States)、また非連合マレー州 (Unfederated Malay States) として、イギリス政府による間接的

な政治・経済的支配の下に置かれていった。³¹⁾ 以下では、こうした植民地支配における状況の変化が、前章にて見てきたようなタミル系ムスリム移民社会の流動性や多種混雑性にどのような影響を与えていったのかを検討する。

この時代における最も大きな変化は、植民地統治下での経済開発を背景に現代に続く多民族状況が海峡植民地及びマレー諸州にもたらされたこと、またそうした状況下における植民地政策を通じて、排他的で明確な境界を持つ近代的な民族範疇が人々の間に浸透していったことである。マレー半島の一部地域では、1820年代ごろより華人資本による錫鉱山の開発が進められていたが、19世紀後半以降には植民地政府からの間接的な援助を受けた移民幹旋人による仲介などを通じて、錫鉱山での労働を目的として流入する華人の人口は大幅に増加した〔金子2001: 29-31〕。また、主に1874年以降、英領マラヤにおける殖産興業政策としてサトウキビやコーヒー、そしてゴムなどの農産物のプランテーション開発が進められると、初期には年期契約移民 (indentured labourer) として、後には徴募移民制度 (Kanganis) の下で、南インド出身のタミル人を中心とするインド人労働者の流入も加速していった〔水島 1999: 147-148〕。英領マラヤでは、このような多民族状況の形成と同時並行的に、近代的な民族概念が導入されていった。人口調査³²⁾における項目の変遷に顕著に表れるその過程については、ハーシュマン〔Hirschman 1987〕が詳しく論じている。彼は人口調査における集団項目の変遷を分析し、1871年に調査が始まった当初はアルファベット順に雑多に並べられていた非ヨーロッパ系住民の集団項目が、1891年以降は「マレー人」「華人」「インド人」の3つの主要なカテゴリに収斂していった事実を示す。そしてその背景に、19世紀後半以降における民族に関する「科学的」理論の一般化、いわゆる帝国主義的思想と結びついた近代的な民族観の浸透があることを強調する。つまり英領マラヤにおいては、19世紀後半以降に中国やインドからの移民が増加し、アジアの人々の間にある大きな差異をヨーロッパ人が認識したまさにその時代に、その複雑さに概念的な秩序を与えるための規範として、近代的な民族観が導入されていったのである〔*ibid.*: 567-568〕。

民族的帰属の複数性や曖昧さを容認せず、すべての人が唯一の明白な場所を持つことを求めるこうした認識は、複数の地域の言語・文化世界を横断する重層的な帰属を有してきた人々の立場に大きな影響を与えていった。その様相は、当時主にインド系ムスリムの男性とマレー人

31) 1896年にペラ、スランゴール (Selangor)、ヌグリ・スンビラン (Negeri Sembilan)、パハン (Pahang) の4州が連合マレー州としてイギリスの保護下に入り、1909年には残りのプルリス (Perlis)、クダ、クランタン (Kelantan)、トレンガヌ (Terengganu)、ジョホール (Johor) の5州が非連合マレー州として緩やかにまとめられ、保護領となった。以下では、海峡植民地との対比においてこれら連合マレー州、非連合マレー州について言及する際、マレー諸州という語を用いる。

32) 植民地政府による初の人口調査は1871年に海峡植民地にて実施され、その後1911年まで10年おきに行われた。連合マレー州では1901年と1911年に調査が実施され、やがて1921年、1931年、1947年には海峡植民地とマレー諸州を合わせた英領マラヤ全体の調査が行われた〔Hirschman 1987: 559〕。

女性との間の通婚から生じた混血集団とその子孫、またはアラブやインドの出自を持つマレー半島生れのムスリムを指す意味でつかわれていた「ジャウィ・プカン (Jawi Pekan)」³³⁾ というカテゴリが、1871 年と 1881 年の人口調査では「マレー人」「インド人」に並ぶ項目として存在していたものの、1891 年と 1901 年時点では「マレー人及びその他島嶼部出身者」の下位範疇となり、1911 年の海峡植民地における調査を最後に項目上から姿を消したことに顕著に表れている [*ibid.*: 571–574; Fujimoto 1988: 40–41]。そして、当初はその当事者たちにとって全く自然でなかったこうした排他的な分類方法も、マレー諸州を中心に展開された土着民たるマレー人を官吏登用において優遇する親マレー人政策 (Pro-Malay Policy) や土地の保護を与えるマレー人居留地法 (Malay Reservation Act)、増加した華人・インド人移民の管理を目的とする様々な植民地行政を通じて人々の間で徐々に物神化されていった [坪井 2011; Shamsul 1996]。

こうしていわゆる「中間カテゴリ」が淘汰されていく過程で、マラヤ生れのインド系ムスリムや混血の出自を持つジャウィ・プカンたちのなかには徐々に自らを「マレー人」の側に定位していく人々が現れた。しかし、彼らによるマレー人性の主張は、1930 年代以降に台頭したマレー人ナショナリズムにおいて、その外来の出自を根拠にしばしば否定された。³⁴⁾ その様相は、「マラヤ・ペンフレンド同盟 (Persaudaraan Sahabat Pena Malaya)」の趨勢に見ることが出来る。同会は、ペナン在住のインド系・アラブ系のムスリムやジャウィ・プカンによって創刊されたマレー語紙『サウダラ』(*Saudara*) の寄稿者サークルを母体に 1934 年に結成されたものであり、マレー語の使用を通じたマレー人意識の醸成を目的として、ペナンを本部にマレー諸州に支部を展開した。しかし活動の拡大とともに、ペナン本部におけるインド系・アラブ系ムスリムやジャウィ・プカンによるリーダーシップに対して州支部のマレー人から反発や批判が向けられるようになり、結果的に 1939 年の改組以降、ペナン本部の役割は弱体化した [Fujimoto 1988: 144–149; Roff 1994: 212–219]。³⁵⁾

33) 「ジャウィ」とはアラビア語話者の間で東南アジアの人または物を指す言葉で、東南アジアにおいては「マレー性を有するに至った、外来の出自を持つもの」のような意味で使用されていた [Laffan 2003: 13–14]。また「プカン」はマレー語で「町」や「市場」を意味する。また、同様の集団を指す意味で既存研究において互換的に使用されてきた語彙としてジャウィ・プカナンがあるが、山本 [2023] はこうした互換的な用法を、各地域の実情の十分な検討なしにシンガポールの事例とペナンにおける状況を一緒に論じている故の誤用であるとし、ペナンにおいては 1920 年代末頃までは「ジャウィ・プカン」の使用が一般的であったことを指摘している。こうした山本の議論に則り、ペナンの状況を分析対象とする本稿においては、当該集団を指す語彙として「ジャウィ・プカン」を使用する。

34) 日本軍政期までのマレー人ナショナリズムの展開については①アラビア語教育を受けた中東志向の宗教改革者、②インドネシア・ナショナリズムの影響を受けたマレー語知識人、③英語教育を受けた地元の支配階層という 3 つの潮流を明らかにしたロフ [Roff 1994] の研究がある。こうしたロフの議論に則ると、インド系やアラブ系のムスリムやジャウィ・プカンによるマレー人性の主張は主に①の潮流に位置づけられ、特に③の潮流に属する人々による批判の対象となったと考えられる。

35) その他、彼らを出自や血統を根拠にマレー人の範疇から締め出そうとする世論の存在は、1930 年代の言論界における指導者的地位にあったアブドゥル・ラヒム・カジャイ (Abdul Rahim Kajai) が、「イス

このように、植民地行政を通じた近代的民族観の浸透、及びその物神化による民族ナショナリズム台頭の過程で、コスモポリタンな港に暮らし、流動的かつ多種混雑的な移民社会を形成してきたインド系ムスリム（及びジャウィ・プカン）の人々は、土着民としての「マレー人」と外来者としての「インド人」という民族範疇の狭間に位置付けられるようになっていった。

その一方で、1945年の第二次世界大戦の終結と、同じ英領下にあったインドとマラヤの脱植民地化は、その間の人の往来を日常としてきた人々に対し市民権の取得というかたちで「マラヤかインドか」という二者択一を突き付けていった。まずマラヤにおいては、日本軍の撤退後、宗主国の地位に返り咲いたイギリスが1946年にマラヤ連合（Malayan Union）案を提出し、民族の出自に関わらず英領マラヤ領内で出生した者、及び1942年に先立つ15年間のうち10年以上マラヤに居住していたことを証明できる外国生まれの者全てにマラヤの市民権を与えることを規定した〔Carnell 1952: 507〕。しかし、こうしたイギリスによる包摂的立場はマレー民族主義、つまりはマレー人の優位性の維持を主張するマレー人エリート層による猛反発を受け、1948年に新たに提出されたマラヤ連邦（Federation of Malaya）案における規定では出生地主義の側面が大きく制限されるなど、インド人や華人といった非マレー系の移民集団の市民権に関する議論が政治問題として表面化した〔*ibid.*: 507-508〕。一方、戦後の英領インドでは、植民地期における分割統治政策を背景として深刻化したヒンドゥー教徒とムスリムのコミューナルな対立が1947年8月のインドと東西パキスタンの分離独立というかたちで帰結したが、1949年に施行されたインド憲法における規定では、在外インド人に対する二重市民権の保有は認められなかった〔Ampalavanar 1981: 125〕。³⁶⁾ 脱植民地化と国家建設に向けた動きのなかで、移民集団の帰属を巡る議論が争点化していたことは、1947年3月にデリーで開催されたアジア関係会議（Asia Relations Conference）において「ひと一人が保有する国籍は常に一つだけである」ことが共通の合意とされたことや、その場において英領マラヤの代表者による「（マラヤにおける）インド人または華人は、彼らがマラヤ市民となるか否かという究極的かつ重大な選択を迫られている」という発言からも読み取れる〔Amrith 2013b: 220-222〕。

ㄨ ラームはインド人ムスリムやアラブ人をマレー人と関係づけるものである」という考えを否定し、「DKK (Darah Keturunan Kling; インドの血)」や「DKA (Darah Keturunan Arab; アラブの血)」といった侮蔑的な呼称をマレー語紙に流行させたことから読み取れる〔Ariffin 1993: 15; Roff 1994: 220〕。なお山本〔2023〕が指摘する通り、このような世論は本来シンガポールにおいてより顕著にみられ、後にペナン（およびマレー諸州）に拡大していったものであることは留意しておく必要がある。

36) タミル系ムスリムを含む当時のマラヤにおけるインド人、特に商人や専門職を中心とするエリート層の多くがインドとマラヤのどちらに属すべきかを決断しかねていた状況は、1946-49年にインド人商工会やインド人政党の指導者たちがインド政府及びその指導者に向けてたびたび二重市民権の認可に関する打診を行っていたことから読み取れる〔Ampalavanar 1981: 125〕。

2. 国民国家制度の余白——維持される流動性

一方で、こうした近代的な民族範疇や市民権という枠組みは、彼らの民族的帰属や人の移動の流動性を完全に固定化したわけではなかった。その証拠は、次章にて紹介する今日のマレーシア社会におけるタミル系ムスリム移民の事例に色濃く表れているが、以下ではそうした流動性が国民国家の時代以降にも維持される余地がいかに残されていたのかを検討する。

まず、民族範疇についてである。上述の通り、民族的帰属の複数性を認めない近代的な民族範疇の物神化、及びその帰結としての戦前のマレー人ナショナリズムの時代において、インド系ムスリムやジャウィ・プカンと呼ばれた人々といったマレー人とインド人の双方の要素を併せ持つ人々をマレー人範疇に含み入れ得るかが争点化した。しかし戦後、1946年のマラヤ連合案に対する反発を契機にマレー人ナショナリズムの性格が変化すると、そこにおける彼らの立ち位置もまた変化していった。つまり、戦前により重視されたような個別の王権や首長に対する忠誠心を超えて、広く団結しうる共同体としてマレー人を再定義すること、そしてその団結を通じて国家運営上のマレー人の優位性を確保することが争点となり [cf. Ariffin 1993]、出自や血統を根拠としたマレー人性の主張が戦前ほど前面に出ることがなくなったのである。³⁷⁾ その様相は、マラヤ連邦の結成に向け1946年に組織された憲法策定委員会 (Working Committee) によって定められ、現行憲法にも続くマレー人の定義が、「①習慣的にマレー語を話し、②イスラームを信仰し、③マレーの慣習に従う者」といった文化的な条件で定められたことに表れており、その定義はアリフィンが述べるように、それら条件を満たす非マレー人 (インド系やアラブ系のムスリムを含む) が「マレーに入る」³⁸⁾ ために十分な多孔性 (porous) を持つものとなった [ibid.: 201]。なお、1957年のマラヤ連邦憲法ではこれら条件に加え「独立の日時点またはそれ以前に本人／両親のいずれかが連邦領内／シンガポールにて出生／居住しているもの、またはその子孫」という留保も付記されているが、前章に見たような彼らの流入経緯を考慮すれば、多くのインド系ムスリムやジャウィ・プカンがこれら要件を満たす存在であったことが分かる。このような戦後におけるマレー人範疇を巡る状況の変化によって、彼らは再びマレー人範疇に含まれ得る存在となっていた。³⁹⁾

37) 戦後のマレー人ナショナリズムの展開について論じたアリフィン [Ariffin 1993] は、統一マレー人国民組織 (UMNO) に代表される保守派とマラヤ・マレー国民党 (PKMM) に代表される革新派におけるマレー人概念の再定義の仕方について詳細に説明しているが、その記述を見る限り、その双方の主張においてインド系ムスリムやジャウィ・プカンの定位が戦前のように争点化することはなかったと考えられる。

38) 注釈3を参照。

39) 一方実際の現場では、彼らが出生登録において自らを「マレー人」を登録しうるかどうかの最終的な判断は、各州の登録局 (Department of Registration) の役人個人の裁量や [Nagata 2006: 527]、出生した病院の判断に委ねられているようである [聞き取り調査より]。なお、ここにおいて出生登録上「マレー人」となることは、マレー人に認められている様々な優遇措置を享受する資格を持つことと同義であるため、マレーシア国内においては非常に重要な意味を持つ。

次に、人の移動の流動性についてである。上述の通り、戦後のインド及びマラヤの脱植民地化と国家建設に向けた動きは、ベンガル湾の東西を往来する人々に、市民権の取得を通じた帰属先の選択を迫ることになった。一方、こうした過程において制度上不可能となったのは単純労働に従事する移民による新規の入国であり、それ以外のかたちでの人の移動、主に親族的紐帯や個人的な商業活動を理由とした人の移動は、両国の法制度に則るかたちで継続した。マラヤにおける市民権取得を巡る規定は、1946年のマラヤ連合案、1948年のマラヤ連邦協定、その後1952年のマラヤ連邦協定修正令、そして1957年独立憲法へと至る過程で少しずつ変化していったが、これら全ての規定で子の市民権取得には血統主義が採用されており、父親がマラヤの市民権を取得していた場合は、マラヤ領外で出生した子にも自動的に市民権の取得が認められていた。⁴⁰⁾ よって、例えばマラヤで商売を営むタミル系ムスリムの男性がある段階でマラヤの市民権を取得した場合、彼の子供がインドで出生した場合でもマラヤの市民権を取得することが出来、マラヤに問題なく入国することが出来た。こうした子の市民権取得に関する血統主義の原則は現行のマレーシア連邦憲法においても採用されており、こうした親族的紐帯に基づく人の移動は（後程事例にて検討していくように）戦後、そして独立以降も存続していたものと考えられる。また、マラヤへの独立付与に先だって1953年に施行された移民入国制限法（Immigration Prohibition of Entry Ordinance）は、「将来のマラヤ国民に対する公的便益の保護」を目的に移民による新規の入国を制限しようとするものであったが [Sandhu 1969: 149–150]、その対象とされたのは主にプランテーションなどでの労働に従事した単純労働者であり、インドで暮らす妻子の呼び寄せや、専門職における就業及び個人的な商業活動を理由とした入国と滞在は、一定の条件を満たしていれば可能であった [ibid.: 151]。⁴¹⁾

前節にてみたように、19世紀後半以降の植民地統治の性格の変化と20世紀前半のナショナリズム、そして戦後の脱植民地化と国民国家建設に向けた動きは、タミル系ムスリム移民社会が有していたコスモポリタンな特質を近代的な線引きの下に囲い込んでいった。しかし、憲法や移民法上の規定に表れるようにその線引きは決して完全なものではなく、彼らの民族的帰属や南インド／マレー半島間の人の移動の流動性はそうした制度のうえに続いてきたと考えられ

40) 1946年マラヤ連合案、1948年マラヤ連邦協定及び1952年修正令、1957年独立憲法における市民権取得に関する規定は金子 [2001: 106–108] の「資料2-2 マラヤにおける市民権取得規定の変遷」を参照した。

41) この移民法の下、マラヤに入国する権利を持つのはマラヤで出生もしくは帰化した英国臣民、マレー諸州の臣民、連邦市民、マラヤに定住する英国臣民、在留許可を持つ外国人、これら人々の妻と18歳以下の子孫とされた。また、新たに入国が可能な移民は「(a) 同様の資格や職能を持つマラヤ市民の利益を侵すことなく、特定の職に就くのに十分な専門性や資格を有する者、(b) マラヤで既に確立したビジネスを営む経営者の下で、内務大臣が認可する諸条件に基づく雇用される従業員、(c) 以上の者の親族、(d) 入国管理法に基づいて発行された許可証またはそれ以外の有効な許可を得て合法的に居住する者の親族」とされた [Sandhu 1969: 150]。

る。以上の背景を踏まえて以下では、こうした歴史的経緯のもとに現在のマレーシアにおけるタミル系ムスリム社会がいかなる背景を持つ人々によって構成されているのかを、筆者によるフィールド調査をもとにいくつかの事例を取り上げて検討する。

III 今日におけるタミル系ムスリム社会——ペナンにおける現地調査から

1. 調査の概要

事例の検討に入る前に、調査の概要について述べておきたい。本調査の調査地は、ペナン州ペナン島のジョージタウン市内である。ペナン島を調査地に選定した理由は、上述の通りペナン島がタミル系ムスリムによるマレー半島への流入の歴史において最も重要な拠点となった場所であり、マレーシア国内におけるタミル系ムスリムの多くがペナンに居住していると考えられるからである。⁴²⁾ 筆者は2022年から2024年にかけて合計約7カ月弱ほど同地に滞在し、⁴³⁾ ペナン在住のタミル系ムスリム、及びそのルーツを持つ人々に対して家族史、移住史に関する聞き取り調査を行った。なお聞き取り調査においては、インフォーマントの使用可能言語に応じてマレー語、英語、タミル語の三言語を使用した。以下では、出生地、国籍、出生登録上の民族範疇（以下、民族ID）といった外形的・公的な属性に基づいて、現在のペナンにおけるタミル系ムスリムをa) マレーシア生れ、マレーシア国籍のマレー人ID、b) インド生れ、マレーシア国籍のインド人ID、c) インド生れ、インド国籍のインド人という3つの類型に分類して事例を紹介する。またそれら事例を通じて、ペナンのタミル系ムスリムたちが今日においてなお、多様な背景を持つ人々を緩やかに内包する、流動的かつ多種混雑的な移民社会を形成していることを確認する。

2. ペナンにおけるタミル系ムスリムの三類型

a) マレーシア生れ、マレーシア国籍、マレー人ID

この類型に含まれるのは、タミル系ムスリムのルーツを持ちながらも、既に数世代を経てマレーシアで暮らし、その過程でマレー人のIDを取得したことで、現在においては他のマレー

42) フジモト [Fujimoto 1988]、クー [Khoo 2014] の歴史研究、またナガタ [Nagata 1974] やピライ [Pillai 2015] による民族誌的記述も、全てペナンにおけるタミル系ムスリムを主な対象とするものである。また、注釈5で示した理由により正確な人口は不明だが、上述したマレーシア・インド人ムスリム団体連合 (PERMIM) に所属するインド系ムスリム組織 58 団体のなかで、ペナン州に本拠地をもつものが 20 団体を占めることから [PERMIM]、ペナンにおけるコミュニティが国内で最も大規模なものであることがわかる。

43) 筆者は2022年8月19日～9月30日、2022年12月18日～2023年4月30日、2023年8月19日～8月30日、2024年5月22日～6月5日の合計4回ペナンに滞在した。また、2023年11月17日にDさんへの追加的な聞き取り調査をオンライン上で行った。

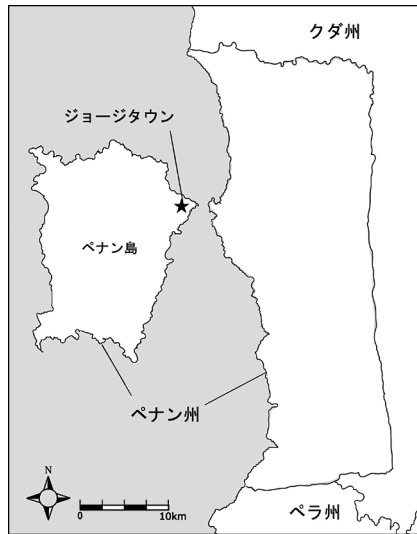


図3 ペナン州と州都ジョージタウン

出所：筆者作成

系住民と同様の外形的・公的属性を持つに至った人々である。ここでは、Aさん、Bさん、Cさんの事例を挙げてその様相を説明する。

まずAさん（20代女性）⁴⁴⁾は、インドで生まれて商売目的でペナンにやってきたタミル系ムスリムを父方の曾祖父に、そしてペナン生れのタミル系ムスリムを父方の祖父に持つ人物である。その祖父は同じくペナン生れのマレー人であった祖母と結婚したため、Aさんの父親はインド人とマレー人の混血である。また母親もまた同様にペナン生れのインド人とマレー人の混血であり、Aさんは複雑な混血のルーツを持つ。祖父以降の親族は皆ペナン生れでマレーシア（またはマラヤ）の国籍を持ち、ペナンで生まれ育ったAさんもまたマレーシア国籍である。また民族IDについては、彼女を含む親族は皆マレー人として登録されているといい、そのことについてAさんは「祖父は生粋のインド人だったけど、マレー人IDを持っていた。ペナンで生まれたムスリムは、例え両親がインド人であってもマレー人に成ることが出来た」と話す。

またBさん（10代女性）⁴⁵⁾は、インドで生まれて商売目的でペナンにやってきたタミル系ムスリムを母方の祖父に、そしてペナン生れのタミル系ムスリムを母親に持つ人物である。母親がペナン生れのマレー人である父親と結婚したため、Bさんはインド人とマレー人の混血のルーツを持つ。両親ともにマレーシア国籍であり、ペナンで生まれ育ったBさんもまたマレー

44) 2022年9月9日に行ったAさんとその父母への聞き取り調査に基づく。使用言語はマレー語と英語。

45) 2023年1月30日、2月5日、3月6日に行ったBさんへの聞き取り調査に基づく。使用言語はマレー語と英語。

シア国籍である。また民族IDについては、本人及び姉妹は皆マレー人として登録されているといい、そのことについてはBさんの姉は「私たちはインド系ムスリムだけど、父親がマレー人だから、マレー人として登録されているのだ」と説明する。⁴⁶⁾

次にCさん(40代女性)⁴⁷⁾は、インドで生まれて商売目的でペナンにやってきたタミル系ムスリムを父方の祖父に持ち、ペナン生れのタミル系ムスリムを父親に、クダ生れのタミル系ムスリムを母親に持つ人物である。両親ともにマレーシア(マラヤ)国籍であり、クダで生まれ、ペナンで育ったというCさんもまたマレーシア国籍である。Cさんの場合は両親ともにタミル系ムスリムであり、上述のAさん、Bさんのように混血のルーツを持たないが、その民族IDにおいてCさんはマレー人として登録されているという。そのことについて、Cさんの夫であるDさん(後述)は、「インド系ムスリムがマレー人として登録され得るか否かは各州の登録局による裁量が大きい。妻(Cさん)は母方の故郷であるクダで生まれたから、マレー人として登録することが出来た」と話す。

b) インド生れ、マレーシア国籍、インド人ID

この類型に含まれるのは、インドで生まれたのちにマレーシアに移動し、様々な経緯でマレーシア国籍を取得したが、民族ID上はインド人であるという外形的・公的属性を持つ人々である。ここでは、Dさん、Eさん、Fさんの事例を挙げてその様相を説明する。

まずDさん(40代男性、Cさんの夫)⁴⁸⁾は、インドで生まれて商売目的でペナンに移動し、20世紀初頭に両替商を創業したタミル系ムスリムの曾祖父を持つ人物である。両替商はやがて祖父、父に受け継がれ、現在はDさんがその後を継いでいる。曾祖父、祖父の時代までは、父親が妻子をインドに残し単身でペナンに渡って商売を続けるかたちが主流であったが、父親が家業を継いだ1960-70年代ごろには妻子帯同での移住が一般化し、Dさん一家もそれまでの単身赴任をやめ、家族総出でペナンに移住することになった。よってDさんは、インドで生まれたのち、6歳のころに母、兄弟とともにペナンに移住した経歴を持つ。国籍については、祖父、父が独立時にマレーシア(マラヤ)の国籍を取得していたため、父親がマレーシア国籍保有者であるという理由で、Dさんと他の兄弟はインド生れであってもマレーシア国籍を取得することが出来たという。⁴⁹⁾ なおDさんの民族IDはインド人となっており、そのことについてDさん

46) 片親がマレー人IDの場合、子供は(インド人ではなく)マレー人として登録されるというのは通説のようであり、その他のインフォーマントへの聞き取りにおいても同様の発言が複数みられた。

47) 2022年12月26日、及び2023年11月17日に行ったCさんの夫であるDさんへの聞き取り調査に基づく。使用言語はマレー語と英語。

48) 2022年12月26日、2023年2月27日、8月22日、24日に行ったDさんへの聞き取り調査、及び両替商店内における参与観察に基づく。使用言語はマレー語と英語。

49) よってDさん一家がインドからペナンへ移住した際、新たに滞在許可を申請したのは母親だけであったという。

は、「(私のような) 出生地がインドになっている人は、マレー人として登録することは出来ないのだ」と話す。⁵⁰⁾

次に、Eさん(50代女性)⁵¹⁾は、インドで生まれ、商売目的でペナンに移動したタミル系ムスリムの父を持つ。独立以前にペナンに移動した父は、当初は妻子をインドに残して単身ペナンに渡り、叔父や兄弟とともに飲食店のビジネスをしていたが、上述のDさん一家と同様に、やがて妻子をペナンに呼び寄せることになった。よってインドで生まれたのち、兄と母とともに2歳のころにクダに移住し、その後仕事を機にペナンに移住した。国籍については先述のDさんと異なり、インドで生まれた際に父親がEさんをマレーシア国籍者として登録しなかったため、Eさんは2歳のころに初めてマレーシアに移住してから成人するまではインド国籍であり、成人後に帰化申請を行ってやっとマレーシア国籍を取得した。なおEさんの場合も、登録上の民族IDはインド人となっているという。

また、Fさん(40代男性)⁵²⁾は上述のDさんのイトコであり、インドで生まれ、商売目的でペナンに移動したタミル系ムスリムの祖父を持つ。Fさんの父親はマレーシア国籍であったが、ペナンで家業を継ぐことなく第三国(サウジアラビア、アメリカ等)にて長く働いていた。その父親がFさんにインドで教育を受けさせることを望んだため、Fさんは生まれてから大学卒業までを母親とともにインドで過ごし、大学卒業後に初めて、より良い就業機会を求めて親族が多く暮らしているペナンに移動した。⁵³⁾ 国籍に関しては、Dさんと同様に、父親がマレーシア国籍者であるため、インド生れであってもマレーシア国籍を取得することが出来たという。またFさんも、登録上の民族IDはインド人となっているという。

c) インド生れ、インド国籍

この類型に含まれるのは、インドとマレーシアの双方に親族的、職業的基盤を持ち、そうした基盤に基づく商売や就労を主な目的として、インド国籍者としてペナンに長期的に滞在している人々である。ここでは、Gさん、Hさんの事例を挙げてその様相を説明したい。

Gさん(40代男性)は、⁵⁴⁾ インドから商業目的でペナンに移住し、20世紀前半に飲食店を開

50) なお、これは「インド系ムスリムによるマレー人としての出生登録」に対するDさんの見解であり、Dさん自身はタミル系ムスリムとしての強い帰属意識を持ち、「マレー人」としての登録を望んでいる訳ではない。

51) 2022年9月21日、2024年5月29日に行ったEさんへの聞き取り調査に基づく。使用言語はマレー語と英語。

52) 2023年2月8日に行ったFさんへの聞き取り調査、及び2023年11月17日に行ったFさんの親族であるDさんへの聞き取り調査に基づく。主な使用言語は英語だが、聞き取りの途中で同席したDさんが、筆者とFさんの間に入ってタミル語⇄英語の通訳を行う場面もあった。

53) Fさんと親族関係にあるDさんの話では、Fさんは書面上はマレーシア国籍であるため、インドの大学に通っていたころには学生ビザを取得してインドに滞在していたという。

54) 2023年1月18日に行ったGさん、またともに飲食店を経営する親族の男性への聞き取り調査に基づく。↗

業したタミル系ムスリムの祖父を持つ人物である。飲食店は父に受け継がれた後、現在 G さんがその後を継いでいる。D さんの事例にて述べたように、かつて主流であった妻子をインドに残して父親がペナンで働くという単身赴任型の移住は 1960-70 年代ごろより妻子帯同型の移住に変化していったが、G さんの飲食店では旧来の方式が貫かれている。よってインドで生まれ、父の後を継ぐために 20 代のころに初めてペナンに移動してきた G さんは、インドに妻子を残したまま、ペナンに暮らす他の親族と協同で飲食店を切り盛りしている。G さんの場合は、祖父と父が独立時にインドの国籍を取得したので、G さん自身、そしてインドに居る妻子ともにインド国籍である。よって G さんは、滞在許可を毎年更新しながらペナンで働き、一年に 1 カ月ほど休暇を取ってインドに戻るという生活を 20 年程続けている。

また H さん（50 代男性）は、⁵⁵⁾ 戦前にペナンのタミル系モスクのイマームを務めていたタミル系ムスリムの曾祖父を持つ人物である。こうしたペナンにおける宗教指導者としての職は祖父、父に受け継がれ、現在 H さんは、地元のタミル系ムスリムから信仰を集める聖者廟ナゲール・ダルガー⁵⁶⁾の管理を務めるウスタズ（Ustaz, イスラーム教師）として働いている。H さんはインドで生まれ育ち、インドで宗教教育を終えた後に 30 歳のころに父の後を継ぐためにペナンに移動してきたが、先ほどの G さんと同様に、インドに妻子を残し、地元のタミル系ムスリムたちとともに廟の管理を行っている。またこれも G さんと同様、祖父と父は独立時にインドの国籍を取得したので、H さん自身、そしてインドに居る妻子ともにインド国籍である。よって H さんもまた、宗教活動従事者としての滞在許可を都度更新しながら、⁵⁷⁾ 2 年に一度 1 カ月ほど休暇を取ってインドに戻るという生活を 20 年ほど続けていると話す。

3. 今に続く流動性と多種混雑性

以上にみてきた三類型とその事例からは、現代のマレーシア、ペナンにおけるタミル系ムスリム移民社会が、インドからマレーシアへと渡るその移動の時期や経緯といった細かな状況の違いによって、相互に少しずつ異なる外形的・公的な帰属を持つ人々によって構成されていることが読み取れる。

こうした状況においては、類型 a) に含まれるような、その公的な属性から判断すればマレー人と見分けがつかないような人々を見れば、「ペナンのタミル系ムスリムはマレー人に同化し

ㄨ 主な使用言語は英語だが、親族の男性が筆者と G さんの間に入ってタミル語↔英語・マレー語の通訳を行う場面もあった。

55) 2023 年 8 月 23 日、2024 年 5 月 27 日に行った H さんへの聞き取り調査に基づく。主な使用言語はマレー語とタミル語。

56) ナゲール・ダルガーに関する説明は注釈 20 を参照。

57) H さんの場合は、イスラーム宗教教師（モスクのイマームやクルアーン教師、アラビア語教師を含む）として、マレーシアにおける長期滞在許可の一種であるプロフェッショナル・ビジット・パスを移民局より取得していると考えられる [Immigration Department of Malaysia]。

つつある」と考えられるかもしれない。しかしその一方で、現在我々が都市部の街角で目にするタミル系ムスリムの大衆食堂や両替商、また上述した聖者廟に代表されるような集団独自の宗教実践などは、類型b)に含まれるようなマレーシア国民でありかつインド人としての帰属を維持し続ける人々、または類型c)に含まれるような、インド国民ながらもマレーシアにも基盤を持ち、滞在許可を得て長期的にマレーシアで暮らしているような人々によって支えられていると考えられる。ここから、本稿の冒頭で述べたような「多数派への同化傾向が指摘される一方で存在し続ける移民集団」という状況のからくりが、今日のマレーシアにおけるタミル系ムスリム移民社会が多様な属性を持つ人々を包摂するコスモポリタンな移民社会として今なお存在し続けていることにあることがわかる。

そしてここで強調しておきたいのが、インドからの通時的な人の流入とその一部の定住化、また長期的な定住や通婚を通じた一部の土着化（≡マレー化）によって流動的で多種混雑的な移民社会が形成されるというサイクルが、第I章に見たクロウファードによる記録やアブドゥッラーの自伝の時代から国民国家の時代である今日にまで続いているということである。もちろん、ベンガル湾を跨ぐ人の移動を取り巻く状況は、第II章にて見たように、マレーシアとインドという2つの国民国家の誕生に伴い大きく変化した。一方で、上記に見てきた事例からもわかる通り、国民国家の誕生以前より存在してきた海を跨ぐネットワークとそれに基づく人の移動は、それぞれの国民国家が定める法制度による様々な制約を受けながらも、それらに則るかたちで今日に至るまで続いている。ここから、国民国家に先行し、今なお存在し続けるベンガル湾海域ネットワークと、マレーシア／インドという国民国家のシステムとの重なり合い、またはその相互作用のうえに、現代マレーシアにおけるタミル系ムスリム移民社会が、今なおそのコスモポリタンな性質を維持し続けているということが読み取れる。⁵⁸⁾

おわりに

本稿ではここまで、ベンガル湾海域における往來の歴史を持つマレーシアのタミル系ムスリム移民社会の歴史の変遷と今日の状況を事例に、海域世界における歴史的な人やモノのネットワークが、国民国家の時代を生きる移民社会においていかに展開し、どのような動態を生み出しているのかを検討してきた。以下ではその論点を整理したうえで本稿における結論を示し、今後の課題について述べる。

58) このような異なる起源を持つ世界システム、またはグローバリゼーションの複層性や重層性について論じたものとして、床呂〔2010〕の研究がある。床呂は、近代以前を起源とし、西欧を中心としない広域的なフローやネットワークを、単なる近代西欧発の世界システムの前段階としてではなく、それとは別の層で同時代的に持続するものと捉え、それら複数のグローバリゼーションの対立や相互作用といった複雑なプロセスを分析することの重要性を指摘している。

前近代より交易を主な目的として南インドのコロマンデル海岸部よりマレー半島に流入してきたタミル系ムスリム移民は、ベンガル湾を跨ぐ活発な人の往来と、その一部によるマレー半島への定住化、また現地のマレー人女性との通婚を背景とした土着化を通じて、その成員性が非常に流動的であり、かつ多様な背景を持つ人々を内包するコスモポリタンな性質を持つ移民社会を形成してきた。

このような伝統的な移民社会の在り方は、19世紀後半以降の植民地統治の本格化、また国民国家建設の過程において、排他的な民族範疇や国籍といった近代的な線引きのもとに囲い込まれ、様々な変化を迫られていった。しかしその線引きは国民国家形成以降においても一定の曖昧さや余白を残すものであり、彼らの民族的帰属の流動性やインド／マレーシア間の人の移動はそうした制度の下で続いてきた。

マレーシア、ペナン島における現地調査からは、こうした歴史的経緯の下、今日のペナンにおけるタミル系ムスリム移民社会が、出生地や国籍、民族IDといった外形的・公的な属性において、a) マレーシアで生まれてマレーシアの国籍を保有し、何らかの経緯でマレー人IDを持っている人、b) インドで生まれたのちにマレーシアに移動し、何らかの経緯でマレーシアの国籍を取得し、ID上はインド人である人々、c) インドの国籍ながらもマレーシアにも基盤を持ち、滞在許可を取得して長期的にマレーシアで暮らしている人々といった様々な背景を持つ人々を包摂するまとまりとして存在していることが明らかになった。

このような事例を通じては、一部の成員が通婚やマレーシア（マラヤ）側での世代を経た居住を通じてマレー人社会に吸収される一方で、南インドからの新規移民の参入を通じて成員が補充され、結果多種混濁的な移民社会が形成・維持されるという近代国民国家の形成以前より見られたサイクルが、市民権法や移民法といった近代的な法制度に則るかたちで今なお存続していることが読み取れる。以上を踏まえて本稿では、マレー人社会への同化傾向が指摘されながらも存在し続けてきた現代マレーシアにおけるタミル系ムスリム移民社会の在り方は、国民国家の誕生に先行して存在してきたベンガル湾を跨ぐネットワークと、マレーシア／インドという国民国家制度との重なり合い、またはそれらの相互作用のうえに展開しているものであると結論付ける。

冒頭に述べたように本稿は、近代国民国家に先行する地域間ネットワークの今日的展開への着目を通じて、国民国家（またはその集合体としての「地域」）という分析枠組みからは見えづらい地域社会の動態を描きだそうと試みたものである。この点において本稿は、マレーシア国内にのみ視野を完結させ、個人の主観的なアイデンティティの変遷のみに焦点を当てていた従来の研究では論じられてこなかったタミル系ムスリム社会の全体像や、そこに存在するベンガル湾を舞台に展開された広域ネットワークの歴史的な連続性を明らかにしたことに意義がある。

一方、多くの課題も残る。まずひとつが、インド側を視野に入れた分析の不足である。海を跨ぐ地域間の連関の歴史に着目した本稿が強調しなかったのは、従来のマレーシア社会論（陸の視点）をベンガル湾海域におけるタミル系ムスリムの往来の歴史という海の視点から補足することで、当地域社会の動態をより立体的に描くことが出来るという可能性である。そうであれば、ベンガル湾の対岸にあるインド共和国の歴史の変遷や社会状況を踏まえた分析も、議論に厚みを出すうえで当然必要となる。この点については今後、文献調査やマレーシア側への移民の送り出し地域となっている南インドのタミル系ムスリム村落での現地調査などを通じてより詳しい分析を加えていきたい。もうひとつは、帰属の選択における当事者たちの意味づけという視点の導入である。個人の主観的なアイデンティティに焦点を当ててきた先行研究に対し、本稿はより客観的・外形的な指標を扱うことで、移民社会の全体像を捉えることを試みた。一方、こうした全体像が明らかになった次の段階では、そうした帰属意識の獲得（またはその重層性や変化）の背後にある当事者自身による意味付けを明らかにしていく必要があるだろう。ここで改めて、これまでいったん迂回してきた主観的アイデンティティという視点を再導入することで、海と陸の秩序がせめぎ合う地域社会の動態をより豊かに描きだすことが出来るはずである。この点については今後、さらにインド及びマレーシアでの現地調査と当事者からの語りの収集を通じて考察を深めていきたい。

謝 辞

本稿は、2023年度に京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科に提出した博士予備論文を加筆修正したものです。主指導教員の片岡樹先生、並びに副指導教員の池亀彩先生、石川登先生には、論文の構想について示唆に富むご助言を多数いただいたとともに、現地調査においても様々なかたちでお力添えいただきました。この場を借りて深く感謝申し上げます。また本稿における現地調査は、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科海外エクスペローラーププログラム、京都大学大学院教育支援機構海外渡航助成金、及び日本学術振興会特別研究員奨励費（JSPS 科研費 24KJ1516）の助成を受けたものです。記して感謝申し上げます。

参 考 文 献

日本語文献

- アブドゥッラー・ビン・アブドゥル・カディール. 1980. 『アブドゥッラー物語——あるマレー人の自伝』中原道子（訳）. 東京：平凡社.（原著 Abdullah bin Abdul Kadir. 1849. *Hikayat Abdullah*. Singapore: Mission Press.）
- 弘末雅士. 2022. 『海の東南アジア史——港市・女性・外来者』東京：筑摩書房.
- 金子芳樹. 2001. 『マレーシアの政治とエスニシティ——華人政治と国民統合』京都：晃洋書房.
- 加藤 剛. 1990. 「『エスニシティ』の概念の展開」『東南アジアの社会』（講座東南アジア学）坪内良博（編）, 215-245 ページ所収. 東京：弘文堂.
- 水島 司. 1998. 「移民・コミュニズム・国民統合——マレー半島のインド人」『移動の地域史』（地域の世界史 5）松本宣郎；山田勝芳（編）, 256-284 ページ所収. 東京：山川出版社.
- . 1999. 「マレーにおける南アジア系移民史」『南アジア系移民——年表および時期区分』

- (Discussion Paper No.4) 大石高志 (編), 145–178 ページ所収. 東京: 東京大学東洋文化研究所.
- 中島咲寧. 2024. 「マレー人とは誰か——境界に立つインド系ムスリム住民の視点から」『アジア・アフリカ地域研究』23(2): 260–276.
- 重松伸司. 1999. 『国際移動の歴史社会学——近代タミル移民研究』名古屋: 名古屋大学出版会.
- 鈴木英明. 2016. 「インド洋——海から新しい世界史は語りうるのか」『地域史と世界史』羽田正 (編), 78–96 ページ所収. 京都: ミネルヴァ書房.
- 床呂郁哉. 2010. 「プライマリー・グローバリゼーション——もうひとつのグローバリゼーションに関する人類学的試論」『文化人類学』75(1): 120–135.
- 坪井祐司. 2011. 「英領マラヤにおけるマレー人概念の土着化——スランゴ州におけるマレー人エリート層の形成」『東洋学報』93(2): 246–221(01–026).
- 和田郁子. 2022. 「インド洋海域史から見た南インド」『南アジアと東南アジア～15世紀』(岩波講座世界歴史4) 弘末雅士 (編), 275–291 ページ所収. 東京: 岩波書店.
- 家島彦一. 1993. 『海が創る文明——インド洋海域世界の歴史』東京: 朝日新聞社.
- 山田 満. 2000. 『多民族国家マレーシアの国民統合——インド人の周辺化問題』岡山: 大学教育出版.
- 山本博之. 2023. 「20世紀前半のペナンにおけるジャウィ・プカン——『ストレイツ・エコ』のマレー人論争から」『マレーシア研究』12: 108–128.

英語文献

- Abdullah bin Abdul Kadir Munshi. 1963. *Hikayat Abdullah*. Kuala Lumpur: Penerbitan Pustaka Antara.
- Ampalavanar, Rajeswary. 1981. *The Indian Minority and Political Change in Malaya, 1945–1957*. Kuala Lumpur: Oxford University Press.
- Amrith, Sunil. 2013a. The Bay of Bengal and the Malay World: Diasporas and Cultural Circulation, c. 1780–1950. *Indonesia and the Malay World* 41(120): 183–197.
- . 2013b. *Crossing the Bay of Bengal: The Furies of Nature and the Fortunes of Migrants*. London: Harvard University Press.
- Arasaratnam Sinnappah. 1986. *Merchants, Companies and Commerce on the Coromandel Coast 1650–1740*. Delhi: Oxford University Press.
- Ariffin, Omar. 1993. *Bangsa Melayu: Malay Concepts of Democracy and Community 1945–1950*. Kuala Lumpur: Oxford University Press.
- Budiwanti, Erni. 2012. Malaysian Indian Muslim's Oscillating Identity: Swinging between Home and Host Countries. *The Nippon Foundation Fellowships for Asian Pacific Intellectuals. The Work of the 2009/2010 API Fellows*. Section IV, Panel 2: 81–87.
- Carnell, F. G. 1952. Malaysian Citizenship Legislation. *The International and Comparative Law Quarterly* 1(4): 504–518.
- Chuah, Abdullah Osman; Shukri, M Salam Abdul; and Yeoh, Syukri Mohd. 2011. Indian Muslims in Malaysia: A Sociological Analysis of Minority Ethnic Group. *Journal of Muslim Minority Affairs* 31(2): 217–230.
- Crawfurd, John. 1820. *History of Indian Archipelago: Containing an Account of the Manners, Arts, Languages, Religions, Institutions, and Commerce of its Inhabitants*. 3 vols. Edinburg: A. Constable and Co.
- Duruz, Jean; and Khoo, Gaik Cheng. 2015. *Eating Together: Food, Space, and Identity in Malaysia and Singapore*. Maryland: Rowman and Littlefield.
- Fujimoto, Helen. 1988. *The South Indian Muslim Community and the Evolution of the Jawi Peranakan in Penang up to 1948*. Tokyo: Tokyo Gaikokugo University Press.
- Hirschman, Charles. 1987. The Meaning and Measurement of Ethnicity in Malaysia: An Analysis of Census Classifications. *The Journal of Asian Studies* 46(3): 555–582.
- Khoo, Salma Nasution. 2014. *The Chulia in Penang: Patronage and Place-Making around the Kapitan Kling Mosque 1786–1957*. Penang: Areca Books.
- Laffan, Michael Francis. 2003. *Islamic Nationhood and Colonial Indonesia: The Umma below the Winds*. London and New York: RoutledgeCurzon.
- McPherson, Kenneth. 1990. Chulia and Klings: Indigenous Trade Diasporas and European Penetration of the Indian Ocean Littoral. In *Trade and Politics in the Indian Ocean: Historical and Contemporary Perspectives*, edited by Giorgio Borsa, pp. 33–46. New Delhi: Ramesh Jain Manohar Publication.
- Nagata, Judith. 1974. What is a Malay? Situational Selection of Ethnic Identity in a Plural Society. *American*

- Ethnologist* 1(2): 331–350.
- . 2006. Religion and Ethnicity among the Indian Muslims of Malaysia. In *Indian Communities in Southeast Asia*, edited by K. S. Sandhu and A. Mani, pp. 513–540. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.
- Pillai, Patrick. 2015. *Yearning to Belong: Malaysia's Indian Muslims, Chitties, Portuguese Eurasians, Peranakan Chinese and Baweanese*. Singapore: ISEAS-Yusof Ishak Institute.
- Roff, Wiliam R. 1994. *The Origins of Malay Nationalism*. Kuala Lumpur: Oxford University Press.
- Sandhu, Kernial Singh. 1969. *Indians in Malaya: Some Aspects of Their Immigration and Settlement (1786–1957)*. London: Cambridge University Press.
- Shamsul, A. B. 1996. Debating about Identity in Malaysia: A Discourse Analysis. *Southeast Asian Studies* 34(3): 476–499.
- Stark, Jan. 2006. Indian Muslims in Malaysia: Images of Shifting Identities in Multi-ethnic State. *Journal of Muslim Minority Affairs* 26(3): 383–398.
- Suryadinata, Leo. 2002. Peranakan Chinese Identities in Singapore and Malaysia: A Re-examination. In *Ethnic Chinese in Singapore and Malaysia: A Dialogue between Tradition and Modernity*, edited by Suryadinata Leo, pp. 69–84. Singapore: Times Academic Press.
- Tschacher, Torsten. 2017. *Race, Religion, and the 'Indian Muslim' Predicament in Singapore*. London: Routledge.

政府刊行物

- Department of Statistics Malaysia. 2011. *Population Distribution and Basic Demographic Characteristics 2010*. Putrajaya: Department of Statistics Malaysia.
- . 2022. *Key Findings Population and Housing Census of Malaysia 2020 Administrative District*. Putrajaya: Department of Statistics Malaysia.

URL

- Immigration Department of Malaysia. Professional Visit Pass. <https://www.imi.gov.my/index.php/en/main-services/pass/professional-visitor-pass/>, (accessed 2024-12-12).
- PERMIM (Persekutuan Pertubuhan India Muslim Malaysia). Our Affiliates. <https://permim.org/our-affiliates-2/#1544853976842-63467e44-cd30>, (accessed 2024-05-17).